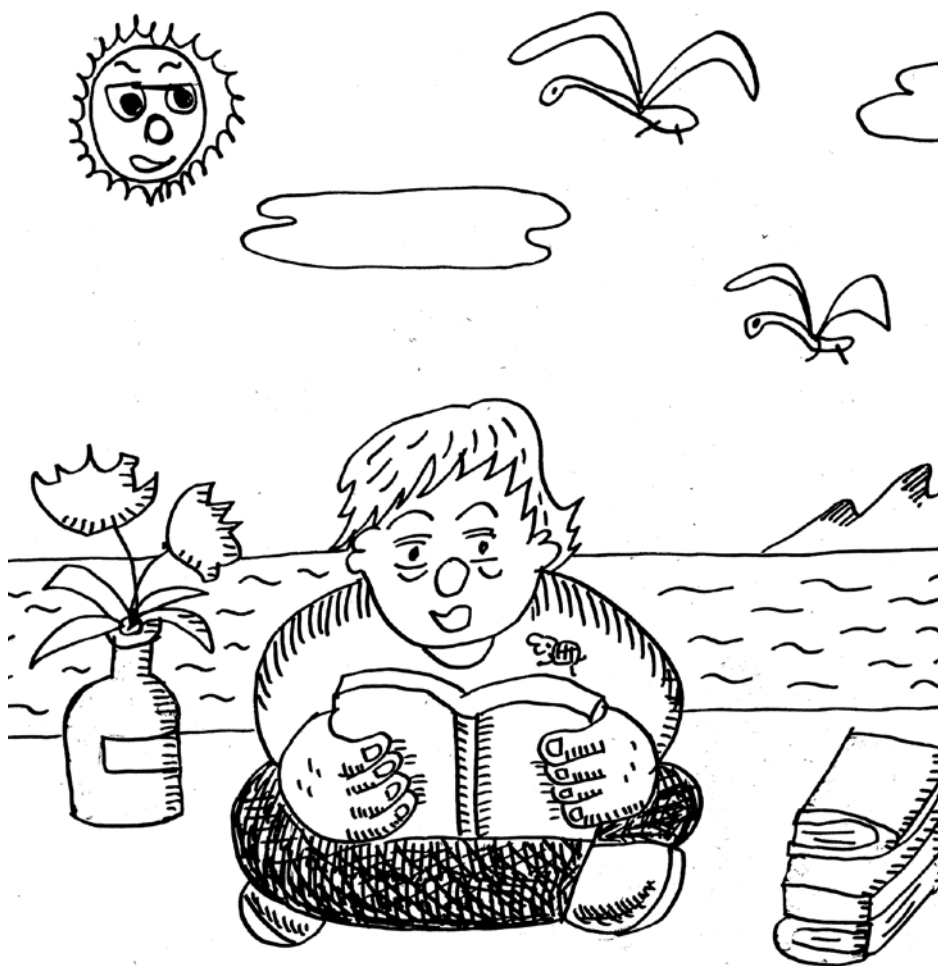


愚痴老人昔話
昭和おちこぼれ
漫画編集者の独白 2



文・イラスト 芦川淳一

前号で、漫画編集者時代のことはほぼ吐き出した
と思っていたのですが、さらに色々と思ひ出すこと
が出てきて、続編を書きたくなりました。ぼく個人
の思ひ出なので、退屈かもしれませんが、ひととき
おつきあいくだされば幸甚です。

●大御所の漫画家たち

文学者たちの世界で文壇というものがあつた時代、
小説関係の仕事をしていた友人が、小説家のなかには、
女を世話しろとか我が儘をいうのがいて困ると
ぼやいていた。どの世界も権力を持つとそういうの
が出てくるものなのかと思つたのだが、自分の属し
ている漫画の世界はどうかと考へてみると……聞
いたことがない。

漫画ゴラクやカスタムコミックなどとおつきあい
があるなしに関わらず、新年会に大御所の漫画家を
招いたことがあつた。

テーブルに石ノ森章太郎、ちばてつや、さいとう
たかを、松本零士、永井豪ほか錚錚たるメンバー

が座つて、実になごやかに談笑していたのを覚えて
いる。ビンゴ大会もとても楽しそうに参加していた。
誰も当たらなかつたのだが、それでも笑顔が絶えな
かつた。

この方たちは権力を嵩に着て女などを要求しない
だらうなと感じた。そんな噂もまつたくない。なん
だか子供がそのまま大人になつたような雰囲気なの
である。

原作者はどうだろう？ なにかありそうだけれど、
聞いたことはない。

●つのだじろっさん

打ち合わせに新宿のつのださんの仕事場兼自宅に
伺うと、二十畳ほどはある応接間に通された。

そこは以前「ワルプルギス（魔女の夜）」という名
のBARで、つのださんが経営していたという。ほ
ぼ改装なしに応接間として使用し、つのださんと親
交のある辻村ジュサブロウの人形がBAR時代から
変わらずにいくつも壁にかけられていた。部屋は暗

いのだが、人形には一つひとつ照明があてられクッキリと浮かび上がって見える。どうにも妖しい雰囲気の一部屋なのだ。ひとりでいると、人形たちじつと見られているような気がして落ち着かなかった。

ぼくが会社を辞めたあとのことだが、この仕事場兼自宅が火事に遭った。かなり焼けたそうで、応接間も被害が甚大だったと聞く。だが、ジュサブロウの人形たちだけは、炎がそこだけを避けたかのように、煤もつかずに無事だったそうである。

●谷岡ヤスジさん

谷岡さんは、米軍払い下げのジープを「生涯一（いち）ジープ」といつて乗っていた。荷台にはバズーカ砲のレプリカを搭載。ファミリージープینگクラブという愛好家の団体に所属して、日曜日などに集団でジープを運転していたそうである。

このジープの助手席に何度か乗ったことがある。谷岡さんはゴーグルを用意していて、自分と同乗者につけさせると、幌を収納し、フロントガラスを前

方に倒してしまふ。風を真つ向から受けながらの運転。風がビュンビュンと顔と上半身に吹きつける。

「オートバイのライダーの気分が分かるんだよね。とても気持ちいいでしょ」

と、嬉しそうにハンドルを切っていた。たしかに爽快で心地よかった。担当編集者はみんな同乗させてもらったはずだ。

●〇型ですが

週刊漫画ゴラクで八〇年代にヒットした「ザ・シェフ」という漫画があつた。テレビ化もされ、東山紀之が主演した。

担当ではなかったが、たまに助っ人に駆り出された。締め切りを過ぎても原稿が上がらず、出来上がった数枚分だけ製版所に届けに行くことがよくあったからで、人海戦術だ。また担当が病気で休み、その代わりに原稿待ちをすることもあった。

原作は早めに上がっているし、筆が遅い漫画家ではない。締め切り近くにならないとエンジンのかか

らないタイプだったのだ。そして、なにかと理由をつけて筆をとめて休む。

当然、早く上げてもらうために急かす。プレッシャーをそれとなくかける。このままだと製版所や印刷所の人たちが終電までに帰れないとか、いろいろだ。少しでも怠けさせず、早く上げでもらうためである。すると……

「あなた、血液型はなんですか」

と、訊かれた。

「O型ですが」

「えっ!？」

漫画家は、驚いてわたしの顔をまじまじと見た。そして、

「そんなはずはないでしょ。O型じゃないよぜつたい」
気色ばむではないか。

なぜかと聞くと、O型の編集者は鷹揚にかまえてせつつかない。焦らず、ただ待っているだけだという。担当も、たまにくるデスクも共にO型で、急かすことがない。そうでないあなたはO型のはずがないと。

ぼくはあきれてしまった。毎回原稿が遅れるのは、

担当やデスクのせいでもあったのだ。遅れても緊迫感がないから大丈夫だろうと、どんどん甘えさせてしまっていたのだ。そういえば、連載当初は締め切り前にちゃんと上がっていた。

手抜きをしても早く上げろというのではない。原作つきなのだから、早めに着手して、コツコツと描けばよいだけのことだ。そりゃ、気分が乗らないときは、少し休んだってかまわない。遅くなりそうだったら、自分のケツを叩いて、スピードを若干上げればよい。締め切りを破っているいまだって、周囲に迷惑をかけながらも、なんとか落とさずにやっているのだから。

「それは血液型とは関係ありません。デスクも担当も無能なだけです。製版所や印刷所で働くひとたちのことをまったく考慮していない鈍感なひとたちなんです」

そんなことは、もちろんいえない。

「血液型で性格は決まりませんよ」

とだけ応えておいた。

●永井豪さん

多くの所属していた週刊漫画ゴラクで、永井豪さんは少年誌で発表した『バイオレンスジャック』の別バージョンを連載していた。

当時、経緯は忘れたが、わたしは、ほかの出版社から永井さんへのインタビューを頼まれた。アルバイトで、もちろん編集部には内緒だ。

そのインタビューで印象に残っているのは、海外旅行（仕事での出張だったかも）での話だ。アメリカ上空を飛行機で通過しているときに、永井さんはいきなり気分が悪くなったそう。悪寒に耐えていると、しば

らくして回復したという。

「どうしてなのかと不思議だったのですが、気分が悪くなっていたとき、ラスベガスの上空を飛んでいたと分かったんですよ。人間のどす黒い欲望が渦巻い



て上空までも昇ってきたので、それが影響したのだと確信しています」

なるほど、永井さんならあり得ることだと思った。なぜそう思ったのか……描く漫画もご自身の雰囲気も、どこか超世俗的で、ご自身が超自然的な能力を持つていても不思議ではないと感じたからである。

●巨人が負けた翌日

ぼくはサッカーやボクシングなどは好きだが、野球には関心がほとんどない。そのせいで、みんなが知っている名字が読めなかつたりする。野球選手のなかには珍しい名前前のひとがいるが、興味がなければ知らないで、そうなるのと無知なやつだと馬鹿にされることになる。

そんなぼくが新入社員だったころ、いつも編集部員より遅く出社する編集長（遅くなるのは、編集長より遅く出社してしまったと恥じいることのないようにという我々への配慮であるらしく、たいてい近くの喫茶店で時間を潰していた）が、ときたまもの

すごく機嫌の悪い顔で編集室に入ってくるのがあり、なにがあつたんだろうと気になつていた。だが、それもほどなく判明した。先輩たちには分かりきつたことだつた。

「昨日、巨人が負けたからだよ」

教えてくれた先輩は、機嫌の悪い編集長に聞こえよがしに昨日の野球について、いかに巨人がダメだったか、相手チームのどこが良かったかについて語り出す。ほかの先輩たちも喜んで参加し、いろいろと戦評をかまびすしくする。ますます編集長の顔は渋くなりムスツと黙つたまま煙草をふかし続ける……なんて光景を懐かしく思い出す。

話は変わるが、ぼくの父は横浜の大学に通っていたせいか大洋ホエールズのファンだった。だが、テレビ中継は巨人戦ばかり。テレビを観ながら、巨人をけなし相手チームを応援していた。つまりアンチ巨人というやつだった。

相手チームが負けていると「だらしねえ」と吐き捨てるようにいつていた。ご存じの通り、その昔は巨人はとても強くて何連覇かしていたので、そりゃ

あ気分も悪くなるだろうなと、関心のないぼくでも分かった気でいたのである。

ところが、巨人が弱くなつてくると、なんと巨人を応援しはじめたのだ。まあ応援といつてもけなすタイプの応援だ。相手チームではなく巨人を「だらしねえ。なつてねえ」と、けなすのである。

つまり、前から巨人が気になつていて、実のところはファンだったのだろう。よくあることのようにだが、ぼくにはその気持ちが分かるような分からないような……いや、まったく分からない！

それに、好きなチームをけなすばかりの応援（？）もさっぱり分からない！

●気前のよい高岡凡太郎さん

ゴラクに連載していた創作落語の師匠が手ぬぐいを作ったことがある。自分の似顔絵が描いてある記念品だ。（なんの記念だか忘れたが）

酒の席で、ぼくは手ぬぐいをひとつくざいと師匠に頼んだ。何度も会っているので気安く所望した

のだが、渋い顔で嫌々ながら渡してくれた。

いつぼう、ほぼ面識のない高岡凡太郎さんに、なかの会合で一緒したとき、ご自身で作ったばかりの手ぬぐいをその場にいた人たちに見せているので、一枚くざいといつたら、どうぞどうぞと快くくざさつた。

なんの話かという、いずれもぼくが図々しかったということである。

●読者ページ

漫画ゴラクでは、ぼくは漫画だけでなく読者の投稿ページも担当した。

ぼくが担当する前は、掲載されている漫画をヨイシヨするヤラセ投稿ばかりだった。書くのは編集者たちで、ぼくも担当する先輩からなんでも頼まれたものである。読者からの投稿もあったが、ほとんど採用されることはなかった。

担当がぼくに代わつてしばらくした時、ヤラセ投稿を書いたり書かせたりするのが嫌になつてきた。

掲載漫画をやたらに褒めてばかりではなにも面白くないのだ。

そこで、数少ない読者投稿を誤字脱字などは訂正するが、ほぼそのまま載せることにした。もちろん漫画をけなすものはないが、絶賛するばかりの内容ではない。独特の感想だったり、注文をつけてくるものもあった。ただ、数が少ないので、それまでのヤラセ投稿も残しつつ掲載しつづけた。すると、目に見えて実際の投稿が増えてきたのである。

さらに、ヤラセでない読者の投稿に「カメ」という名前でぼくがレスポンスすると、どんどん投稿が増えていった。投稿が採用されると分かれれば、投稿者が増えるのは当然だ。ヤラセ投稿かそうでないか、読者は見破っていたのである。常連も増えて、読者欄の仕事は楽しいものになった。

会社を辞めて四十年あまり。先日、ぼくのプロブログに、当時投稿していた方がコメントを寄せてくれた。ゴラク誌上で、永井豪ファンクラブの存在と連絡先を告知したことで、その人はクラブに入会していたのだが、ぼくのいまの仕事を知っている方がファン

クラブにいて、最近の会合でぼくが「かめ」であることを教えてくれたのだそう。嬉しいことである。

●アイドル担当

グラビアページで、アイドルを担当していたのは、ミーハーのぼくである。

一日密着取材では、杉浦幸を一日中密着。後藤久美子は、要所要所を撮影して、なんちゃって一日密着。たまになので、わくわくする仕事だった。これが日常の仕事になると……飽きてしまったらう。漫画の編集者でよかったと思ったものである。芸能プロダクションの人に、

「漫画家の先生に会えるなんて、うらやましいなあ。ぼくらの仕事は、子供相手だから退屈ですよ」

ともいわれた。子供とはタレントのことである。

会社を辞める一年ほど前、会社でアイドル雑誌を出すのでオブザーバーをしてくれといわれた。どんなアイドルを取り上げるのがよいとか、担当編集に助言するだけの仕事だ。担当編集は方針を決めて、

実際の編集作業は下請けの編集プロダクションがする。オブザーバーを勤めることに、もちろん否やなかったが、とても雑誌がつづくとは思えなかった。

当時、老舗の「BOMB!」(学研・現在はワン・パブリッシング)と後追い雑誌の「DUNK」(集英社)があり、判型もその二つの雑誌と同じにした。雑誌名は「BOO!」だ。どうしても内容は似てしまい、そうなる则と大手に敵うはずがない。つづかないというぼくの悪い予想は当たってしまい、やがて廃刊となった。

「君がやりたいといったらまかせたのに」

と、辞表を出したときにお偉方にいわれたのだが、勝算があるはずもない。実際に手がけた先輩は成功すると踏んでいたのだろうが、なぜそう判断したのか不思議でならなかった。

もつとも、その前に社長の肝いりで週刊文春やポストと対抗する週刊誌を発刊したのだが、誰もが無理だといっていて、その通りになり、多額の損失を出して廃刊になった過去がある。無謀なことをする出版社だったのである。というか社長が無茶だった

のだ。

しかし、それで会社が危うくなることはなかった。漫画ゴラクが多大な利益を出していたからである。いまは青息吐息のようだが。

当時は、出版界にとつて、とくに漫画業界にとつては実に恵まれた時代だった。

(了)